

Episode 1

私は鏡に自分の姿を映すのが好きだった。体はすっかり女体化している。白い肌、華奢な肩幅、括れた腰つき、ぷりんとしたお尻。そのすべてが私のものなのだ。

女になって一年ほど経つ。その間にもいろんなことがあった。私がここまで女性になりきれたのは、姉を始めとする家族のお陰だった。

バイク事故に遭って、一命を取り留めたが、私は男性器を失った。それを形成外科医の父が女性器に作り直し、私は女性としての人生を強いられたのだ。

今はそれで良かったと思っている。最初は戸惑って毎日泣いていたけど、今は父に感謝している。ニューハーフになったことで世間の風当たりが強いこともあるけど、家族の支えがあって、私はすっかり元気になり、女として生きることを楽しんでいた。

そして今はとても充実している。

鏡に映った私の体はほぼ完璧だった。骨格に多少男を残しているが、それは仕方がない。でも、元男だと知らない人が見たら、女と信じて疑わないだろう。女性ホルモンの威力を私は痛烈に感じている。本当にすごいと思っていた。

男だった私をここまで女にしてしまうなんて――。

そして、そんな美しい体になった私にも一つだけ欠点があった。私はときおり、その部分を指でなぞることがある。

左腹部にある刺し傷だ。今はあまり目立たなくなったけど、はっきりとそれと分かる傷だ。それは同時に心に残る傷でもあり、私の黒歴史となっていた。

あの目は未だに脳裏に焼き付いている。恐ろしく暗い輝きを持った夏美の目だった。彼女はナイフを私に向けたまま突進してきたのだ。

腹部にかつてない激痛を覚えた。そのあとのことはあまり覚えていない。大騒ぎしていたことまでは覚えているが、私はその後、意識を失ったのだ。

気が付いたら父の病院のベッドの上だった。そしてまた母の美和子と姉の葉子が涙目になって、心配そうに見守っていたのだ。

バイク事故の傷が癒えて、やっと退院できたと思ったのに、夏美のお陰で再び病院へ逆戻りだった。

私は自分の体を鏡に映す度に、その事件のことを思い出す。でも私は彼女を恨む気なんて微塵もない。悪いのは私だ。彼女に刺されても仕方ないことをしてしまったのだ。あの子の婚約者である智弘を寝取ったのだから。二人は結婚する予定だった。それを知っていて彼に近づき、体の関係になったのだ。

夏美はそのとき智弘が撮った画像を見てしまったのだろう。そして私に憎悪を覚えたのだ。そのあとは想像するに容易い。果物ナイフを持参して、私が働いている美容室に来た夏

美は、それを取り出し、私を襲ったのだった。

私は激痛を覚えて、その場に崩れた。

その後、彼女は取り押さえられて警察に連行された。彼女は四年の実刑判決を受けて、今は栃木刑務所に服役している。

今でも時々考えることがある。私と夏美、どっちが悪いのだろう。智弘を寝取ったのは確かに私が悪いが、そのあと彼女に刺されたことで十分に報いは受けている。おあいこだと単純に考えていいのだろうか？

彼女は四年間、自由を奪われ、経歴に傷がついた。そちらの方がリスクが大きいと思う。私は痛い思いをして生死の境を彷徨ったようだが、それでも今は元気になって人生を楽しんでいるのだ。幸せを噛みしめている。

今では私の方が罪が重いのではと考えるのだ。姉にも言われてしまった。退院してから私にこう言ったのだ。

「今回のことはあんたに同情できないよ。刺されるようなことをしたんだから。夏美さんに詫びろとは言わないけど、十分に反省しなさい」

怒ってはいなかったが、やんわりと私にそう言った。

それは私も同感だった。夏美には悪いことをしたと思っている。それも彼女に振られた腹いせだったのだ。夏美の幸せをぶち壊したのは私の方なのだ。恨まれても仕方がないのだと思っている。

姉は事件のことについて、それ以上は言わなかった。

「七海い！ 行くわよ」

姉が私の部屋に入って来た。私は今でも母の美容室でアルバイトをしている。美容師になりたいわけではないが、母と姉と一緒に働いていた方が気が楽なのだ。気心しれた家族といった方が楽しかった。

そして、そこで働いているスタッフの佳穂という女の子と、悠馬という男の子と仲良くしてもらっている。二人とも同年代で何かと話が合うのだ。休憩時間には三人でお喋りしていることが多い。

また店が終わった後には、みんなで食事に行くこともしばしばあった。その時間も私は本当に楽しかった。自分だけこんなに幸せでいいのだろうかと思ってしまう。それもこれも私が女の子になったからだと思う。

男のままだったら、相変わらずバイトをしている毎日で、つまらない生活を送っていたことだろう。姉ともこんなに仲良くはなれなかったと思う。女の子だから美容室にも入れたし、みんなにも溶け込んでいけたのだと思うのだ。

「はい。今行く」

私は急いで支度をして、姉たちと一緒に家を出ていった。今日もバイトだ。一年もやっているんで、すっかり仕事は覚えて、自分で行動できるようになっていた。

備品の発注なども私の仕事になっている。シャンプートリートメント、カラー剤、パーマ

液、ブリーチ剤など、私が定期的に在庫を調べて発注しているのだ。